

文化價值體系問題(二)

米田庄太郎

第一節 社會學に於ける社會現象の位階的分類問題

余は本論文緒言中に述べし主旨に従ひ、先づ社會學に於ける社會現象の位階的分類問題から考察し始めるが、今社會學者中社會現象を單に分類するだけに止めず、更に之を位階的に排列して其の位階的秩序を立てる必要を始めて唱へ出し、且つ是れを以て社會學の最も根本なる一原理と見做したるは白耳義の著名なる社會學者ヅ、グレイフ(De Greef)であると思ふ。それで此處に先づ同氏の説を考察したいと思ふ。

ヅ、グレイフの社會現象位階的分類説は、同氏自から言明されて居る如く、先づコントが學問の位階的分類を立てる標準となせるものを、社會現象にも適用し、以て社會現象の位階的分類を立てんとするものである。而してコントが學問の位階的分類を立てる標準となせるものと云ふは、即ち學問の對象たる現象の普遍性ゼネラリテ或は遍在性

の遞減と、之れと反比例をなす其の複合性コムプレキシテの遞増とである。

ツ、グレーフの考へる處によれば、コントが自然現象の遍在性の遞減と複合性の遞増とを原理として、之を位階的に排列し、而して之れに基いて學問の位階的秩序を立てたるは、一大創見であるが、併し彼は右の二原理によりて學問の位階的秩序を立て、社會學の地位を確立するだけに止まつたのは、論理的に不徹底であり、且つ彼は右の二原理の重要をまだ充分に理解して居なかつたと思はれる。右の二原理は宇宙現象の大部類或は大範域を位階的に區別し、排列する爲めに最も重要なもの、或は最も正當なるものであるとすれば、夫れは更に各大部類内に於ける現象の分類にも當然適用せられ、各大部類内に於て夫れ々小部類を對象とする諸科學も亦、位階的に排列さる可きである。

ツ、グレーフは右の如き考へからして、遍在性の遞減及び複合性の遞増の原理を、社會現象内の分類に適用し、而して社會現象を位階的に分類せんとし、又之れに應じて社會科學を位階的に分類せんとしたので、かくて同氏は左の如き社會現象の位階的
分類を立てたのである。

象	現	治	政	(7)
象	現	律	法	(6)
象	現	德	道	(5)
象	現	仰	信	(4)
象	現	術	藝	(3)
象	現	殖	生	(2)
象	現	濟	經	(1)

ズ、グレイフの考へる處によれば、社會現象中其の遍在性最も大にして、而して其の複合性最も小なるものは經濟現象である。又之れに次で遍在性大にして複合性小なるものは生殖現象である。而して其の遍在性最も小にして、其の複合性最も大なるものは政治現象である。此くて同氏は右の如き社會現象の位階的秩序を立てたのである。されど同氏の説は遍在性の遞減と複合性の遞増とを原理として、右の如き位階的分類を立て、以て社會現象の研究、社會科學を組織すると云ふだけに止まつて居ないので、同氏は右の位階的分類に、社會學上から見て根本的に重大なる意味を含ませて居るのである。夫れは遍在性の比較的に大にして、複合性の比較的に小なる社會現象は、遍在性の比較的に小にして複合性の比較的に大なる社會現象を、原因的に規定或は決定すると云ふことである。つまり右の位階的秩序を原因的秩序と見ゆることである。同氏自身の言葉によりて云ひ表はせば、下の現象は上

の現象の基礎或は源泉にして、常に上の現象に影響を及ぼし、其の現象の形成及び變動を規定するものである。而して上の現象が下の現象に與へる反動的影響も行なはれるが、併し其の力は甚だ微弱にして、特に注意する程の値なきものである。尙ほ同氏は右の表によりて察せられる如く、經濟現象は他の一切の社會現象の基礎或は源泉にして、一切の社會現象中最とも根本的な、最とも深奥な、最とも安定的なものであると解し、夫れより順次に上につれて、社會現象は表面的な、不安定的な、變動し易きものとなるを認め、而して此の如く基礎現象が表面現象に根本的な影響を及ぼし、下の現象が上の現象を決定すると云ふことが、社會學の最とも重要な法則であると考へるのである。

以上述べし處によりて、ヅ、グレイフは同氏の立つるが如き社會現象の位階的分類に、社會學上如何に重要な意味を認めるか、察知されるが、向ほ此處に同氏の説に就て注意すべきは、經濟現象を以て一切の社會現象中最とも基礎的な或は根源的なものと見る思想である。而して此の思想はコントの遍在性の遞減及び複合性の遞増の原理を、社會現象に適用せる純論理的結論として論述されて居るが、しかし少しく注意して見れば、殊にヅ、グレイフの思想生活の歴史を知るものには、決してさうで

ないことが覺られるのである。要するにヅ、グレイフ氏は始めマルクス派の社會主義を奉じ、且つ實際運動にも携はつて居たので、早くより經濟現象を以て一切の社會現象の基礎或は根源と見る思想を抱いて居たのである。而して同氏は後學界に身を投ずるに至つても、尙ほマルクス思想を固持し、又其の思想を根柢として社會學を建設せんと企だてたのであるが、其の際コントの學問位階説の原理を巧みに利用して、以てマルクスの思想を辨護せんとしたのである。さればヅ、グレイフ氏の社會現象の位階説は、表面上より見れば、コントの思想の擴張であるが如くに見へるが、實際に於てはマルクス思想の精練であるのである。即ちマルクスの唯物史觀をカントの學問位階説の原理によりて精練せるものである。さればヅ、グレイフ氏の社會現象位階説の眞義をよく理解する爲めには、吾人は先づ之をマルクスの唯物史觀に結び附けて考察し、次に夫れがコントの學問位階説の原理によりて如何に基礎附けられて居るかを吟味しなければならないのである。

マルクスの唯物史觀の一般は、今や我國に於ても二三年前よりのマルクス流行によりて、廣く知られて居ると思ふから、此處に別に述べる必要はないが、併し之を學問的に批判的に考察すると、我國の通俗マルクス主義者の説いて居る程明瞭な

ものでも、亦單純なものでもないのである。マールクス主義者の普通に解する處によれば、經濟は一切の社會生活の基礎にして、先づ夫れによりて政治及び法律、次に觀念的現象が規定或は制約されて發達するのである。併し經濟と其の他の社會現象との嚴密なる因果關係に就ては、マールクスの説く所は尙ほ曖昧である。それでマールクス派の學者間にも、亦マールクス批評家の中にも、種々なる解釋が下されて居るのであるが、とにかくマールクスは經濟を一切の社會現象の最根本的な基礎或は最根本的な原因として、社會現象の間に原因的位階秩序を立てようとした事は確かである。されば社會學者間にありては、ヅ、グレーツを以て一般に社會現象位階説の創説者と見做して居るが、實際上其の創説者はマールクスであるので、而してヅ、グレーツの功績はつまりマールクスの説を、コントの學問位階説の原理によりて精練せんとした點にあると云はねばならぬ。マールクスは只簡單に經濟を基礎或は原因として先づ政治及び法律が規定或は制約せられ、次に直接に經濟によりてか、又は政治及び法律を通じてか、觀念的現象が規定或は制約されると云ふに止まつて居るが、然るにヅ、グレーツは遍在性の遞減と複合性の遞増とによりて經濟、生殖、藝術、信仰、道德、法律、政治等の詳しき位階を立て、而して經濟を根源或は根本原因として、他の一切

の社會現象が順次に決定される法則を究明せんとしたのである。併しツ、グレイフは經濟を以て一切の社會現象の根本的基礎或は決定力或は原因と見ると同時に、他の社會現象が經濟の上に及ぼす反動的影響を無視する點に於て、少なくとも理論上之を重要視しない點に於て、マルクスの精神を固持して居ると思ふ。そこでツ、グレイフの社會現象位階説に就ては假令經濟を以て一切の社會現象の根本的基礎と認め、社會現象に一定の位階的秩序の存在するを認めんとするものにも、少なくとも二つの問題が起つてくる。一は社會現象の詳しき位階秩序は、遍在性の遞減及び複合性の遞増と云ふが如き單純なる原理によりて立て得られるかと云ふ問題にして、二は經濟の上に他の社會現象の及ぼす反動的影響はツ、グレイフの考へる如く重要ならざるものであるかと云ふ問題である。但しツ、グレイフの社會現象位階説を詳しく研究せんとする人々は、特に同氏の左の著書を閲讀されることを望む。

Introduction à la Sociologie. 1886.

La Sociologie Economique. 1904.

却説右に述べし二つの問題の上から見て、ツ、グレイフの社會現象位階説に修正を加へんとした社會學者は幾多あるが、此處には其の中の最とも詳細を極めたるもの

ゝ一として、伊太利の著名な社會學者アスツラロの說を擧げて置く。

アスツラロ (Asensario) は先づ複雑極まれる社會現象の間に、一定の位階的秩序を立てんとするに當つて、ツ、グレイフの如く單純に一の原理或は標準を用ひるだけでは、到底満足なる結果を得られるものでないと考へ而して左の六種の標準を立て、其等の標準から見たる複雑なる合致的關係に基いて、一定の位階秩序を樹立せんとするのである。

- (1) 決定するものと決定されるものとの因果關係
- (2) 目的と手段との因果關係
- (3) 發生的因果關係
- (4) 切迫の度合
- (5) 複合性の度合
- (6) 遍在性の度合

アスツラロが右の六つの標準より考察して立てたる社會現象の位階的秩序は左の如くである。

象	現	問	學	(9)
象	現	術	藝	(8)
象	現	教	宗	(7)
象	現	德	道	(6)
象	現	治	政	(5)
象	現	事軍及爭戰		(4)
象	現	律	法	(3)
象	現	殖	生	(2)
象	現	濟	經	(1)

アスツラロは又第二の問題、即ち經濟現象の上に及ぼす他の社會現象の反動的影響に就ても、其の反動的影響を重要視する點に於て、ツ、グレイフと見解を異にして居る。同氏は上の社會現象が下の社會現象の上に及ぼす反動的影響の、決して輕視す可べものでないことを力説し、夫れは複雑なる社會現象にありては當然な事であると考へ、而して唯物史觀の如く、只經濟現象が他の社會現象の上に働く方面のみを偏重して、以て一切の社會現象を正當に説明せんとすることは到底不可能であると論じ、更に經濟現象に就ても、他の社會現象が其の上に及ぼす反動的影響に注目するに非らずは、充分に之を説明し得ないことを論證して居る。しかも同氏も矢張り右の六種の標準より見て樹立せる社會現象の位階秩序は確乎不動のものなるを主張し、且つ此の位階秩序が社會學上如何に重要なかを論じて左の如く述べて居る。

「社會界に於ても實在の他の諸界に於ける如く、結果が原因の上に起す反動及びより多く複合的にして、より少なく遍在的なる現象が、より多く單純にして、より多く遍在的なる現象の上に起す反動は、決して此の嚴格なる系列の項目の順位を顛倒するまでに至るものでない。而して一般社會學の眞理の原本的中核は、此の嚴格なる系列の中に含藏されて居るのである云々。」

但しアスツラロの説の詳細を知らんとする人々は、同氏の左の著書を閲讀された

る。

La sociologia, i suoi metodi, le sue scoperte. 1897.

, , , 2 Sdz. 1907.

Il materialismo storico e la sociologia. 1903.

今アスツラロの社會現象の位階的秩序をツ、クレーフの夫れと比較すると、先づ經濟現象を以て最も根本的なるものと見るに於て、兩者は一致して居る。更に生殖現象が直ちに其の上にあると見るに於て、即ち先づ經濟現象に決定されて先づ第一に發達する社會現象は、生殖現象であると見るに於て、兩者は又一一致して居る。併し夫れ以上に至つては兩者の差異は随分大なるものである。例へば政治現象及び法

律現象はヅ、グレイフの位階説序に於ては最も上に置かれて居るが、アスツラロの位階説に於ては法律現象は生殖現象のすぐ上に置かれ、又其の上に戦争及び軍事現象なる新しき部類が立てられて、而して其のすぐ上に政治現象が置かれて居る。又ヅ、グレイフの位階説に於ては藝術現象は生殖現象に直ちに連続して居るが、アスツラロの位階説に於ては餘程上に置かれ、其の上には只學問現象があるだけである。

今アスツラロの位階秩序とヅ、グレイフの位階秩序とに於て、右に述べしが如き差異の生ぜるは、是れヅ、グレイフは只遍在性の遞減と複合性の遞増とを標準とするだけであるが、アスツラロは尙ほ其上に四種の標準を用ひて居るが爲めであるか。つまりアスツラロの説は一層詳密なる標準に基いて立てられたるものにして、隨ふてヅ、グレイフの説よりも、一層勝れたるものであるか。直ちにそう斷言するとは出来ない。詳しく吟味して見ると、余輩はヅ、グレイフの用ひたる標準だけによりても、アスツラロの位階の如きものを立てることが出来れば、又アスツラロの用ひし六種の標準によりてヅ、グレイフの位階の如きものを立てることも出来るのである。と云ふのは兩氏は其の標準を嚴格に論理的に運用して居るのでなく、其の運用に於て幾多の非論的或は恣意的要素を混じて居るからである。現にアスツラロの説に従ふ

て、藝術社會學を建設せんと試みたるバラトノの如きは、同一の標準を用ひながら、アスツラロの系列に於ける學問と藝術との順位を顛倒して、學問の上に藝術を置いて居るのである。(Baratono, *La Sociologia Estetica*. 1889.)

然るに吾人若し一切の非論理的或は恣意的要素を排除して、純論理的に嚴密に考察する時は、恐くはヅ、グレイフの立てた標準によりて何等の位階的秩序に達し得ないのみならず、アスツラロの立てた複雑なる標準によりても、矢張り何等の位階的秩序にも達することは出来まいと思ふ。而して原因的見地より考察して、吾人の確實に到達し得る結論は、つまり諸種の社會現象は相互に對して並立相關的關係を有するものにして、決して位階的關係を有するものでなく、隨ふて彼等の間に原因的見地からして位階的秩序を立てることは、不可能であると云ふことである。ヅ、グレイフはコントが學問位階説の原理としたものを、社會現象の調整に適用して、社會現象及び社會科學の位階秩序を立てなかつたのを非難して居るが、夫れは決してコントの缺點ではないので、コントは諸種の社會現象間の連帶關係、即ち並立相關的關係を認めたるが故に、ヅ、グレイフの企だつるが如き社會現象の位階的秩序を立てんとはしなかつたのである。要するに余は社會現象間にはヅ、グレイフやアスツラロなどの

一派の社會學者の主張するが如き、原因的位階秩序は存在しないもので、彼等の關係は並立相關的なものであると考へるのである。而して是れ第十九世紀の終り頃或は第二十世紀の始め頃に於て、社會學者がツ、グレイフやアスツラロなぞの一派の主張を批判的に考察しつゝ、到達したる一般的結論であると思ふ。

今余輩が社會現象位階説の主張を批判的に排斥しつゝ、並立相關説に到達するに至れる過程に於て、此處に注意す可きものがある。夫れはツ、グレイフの如く始めて社會現象位階説を唱へ出した人々は、彼等が最も根本的な社會現象の絶對的原因性を主張し、又其の順位に於て下の社會現象が上の社會現象に及ぼす原因作用のみを偏重して、上の社會現象が下の社會現象に及ぼす反動的原因作用を殆んど無視したが、アスツラロの如きに至りては上の社會現象の反動的原因作用をも大に重要視して來たと云ふ事である。もつともアスツラロの如き人々にありても、尙ほ下から上への原因作用は最も根本的なものにして、上から下への反動的原因作用は結局は二次的なものであると考へて居るが、しかもとにかく上から下への反動的原因作用を重要視して來たと云ふことは、大に意味あることであるのである。而して此の反動的原因作用を重要視する度合の増大するにつれて、彼等が始めに立て

たる位階的關係は實際上段々に並立相的關係に轉化して行くのである。下から上への原因作用と共に上から下への反動的原因作用をも重んずると云ふことは、結局は原因の見地より見れば、社會現象の間には上下の位階的關係は存在せず只並立相關係が存在するのみであると云ふ結論に到着せざるを得ないのである。

今右に述べし如く社會現象間に位階的秩序を立てんとする思想が、始めには只下より上への原因的作用のみを重要視する傾向を有せしが、後には上より下への反動的原因作用をも重要視するに至れる際、或は夫れよりも少し以前に此の思想の根源とも見做さる可きマールクス派の唯物史觀に於ても、重要な變動の起れるとは、吾人の大に注意す可き點であると思ふ。而して余は其の頃唯物史觀に於て起れる右の變動は、マールクスと共に唯物史觀を創說せる人と認められるエンゲルスが、唯物史觀に就て新たに説述せるとによりて、最も明らかに學ばれ得ると考へるのである。それで此處に參考の爲め、唯物史觀に關するエンゲルスの晩年の見解を少しく述べて置きたいと思ふ。而して唯物史觀に關するエンゲルスの晩年の見解と云ふは、彼の死去せる千八百九十五年に、*Der sozialistische Akademiker* 及び *Leipziger Volkszeitung* に於て公にされたる彼の書簡に於て、學ばれるのである。併し此處には右の書簡に

就て詳しく述べる餘白はないから、只唯物史觀に關して特に重要と思はれる點を、ゾルトマンの著作 (Ludwig Volmann, Der historische Materialismus. 1920) によりて簡單に述べるに止める。

先づ Der Sozialistische Akademiker に於て公にされたる第一の書簡 (H 附千八百九十年九月二十一日) の中にはエンゲルスは左の如く述べて居る。

「唯物史觀に従へば、歴史に於て最後に規定或は決定する要素は、現實なる生活の生産及び復産である。夫より以上はマイルクスも亦余も嘗て主張したことがない。今人若し右の命題を経済的要素は唯一の決定的な素因であると云ふ様に曲解するならば、彼は其の命題を一の無意味な、抽象的な荒唐な文句に化するのである。經濟的狀態は基礎である。併し上構(ウパガマ)の諸素因、即ち階級闘の政治的形態及び其の結果勝利を得る階級が制定する憲法、法律形體、更に總て此等の現實なる闘争の關係者の腦髓に於ける反射、例へば政治的、法律的及び哲學的理論や、宗教的觀想及び其の教義體系に發達すること等の如きものも亦、歴史的闘争の進行に於て影響を及ぼし、多くの場合に於て主として其の形體を決定するのである。面して總て此等の諸要素の相互作用に於て、終局偶然、其の内部的關係は甚だ遠く、或は證明し難く、此くて吾人は其

の關係を存在しないと考へて、看過し得る程の事物及び事件の一切の無限なる多數によりて經濟的運動は必然的なるものとして遂成されるのである。若し然らずば、唯物史觀の理論を何れかの歴史時代に適用することは、單純なる一次方程式を解くよりも尙ほ一層容易であるであらう。

「吾人は自から吾人の歴史を作る。併し吾人は先づ第一には、確實に規定されたる前定及び條件の下に於て、之をなすのである。而して其等の前定及び條件の中にて、經濟的なるものは終結的に決定的なるものである。併し政治的なるもの及び其他のものも亦、否な人々の頭の中に浮遊する傳説すらも、よし決定的ではなくとも、一の役目を演ずるのである。普魯西の國家も亦歴史的な、最後には經濟的な原因によりて生起し發達したのである。併し北獨逸の多數の小國中、まさしくブランデンブルグが經濟的必然性によりて、而して他の要素にも依らずして、南部からの北部の經濟的、言語的差異、及び宗教改革以後では、宗教的差異が具體化される一強國となる可き運命を有つて居たとは、術學的ならずしては、決して主張され得ないであらう。過古及び現在の總ての獨逸小國家の存在、或は高地獨逸の語音變化の始源を、經濟的に説明することは、學者の嘲笑を受けずには出來ないであらう。

「尙ほ第二には歴史は、最後の結果は常に多數の箇別意志の衝突から生れる様に作られる。而して其等の箇別意志の各々は特殊的生活條件の多數によりて、夫れがある處のものに作られるのである。此くて一の合成果即ち歴史的事件は、無數の相互に交錯する勢力或は勢力平行四邊形の無限的な一群から生じ其の合成果其物は又全體としては、無意識的及び無意志的に作用する一の力の生産物として、見做し得られるのである。蓋し各箇人の意欲するものは各他人によりて妨げられ、而して結局生起するものは、何人も意欲しなかつたものであるからである。此くて是れまでの歴史は一種の自然過程に従ふて進行し、而して又本質的には同一の自然法則に従ふたのである。併し其等の箇人意志其の各々は箇人の體質及び彼れ自身の又は一般社會的なる外部的な結局は經濟的な境遇が彼に強いる處のものを意欲するのであるは其の意欲する處のものを成就せずして、全體的平均、一の共同的合成果に融合すると云ふことからして、吾人は尙ほ其等の箇人意志は無に均しいと推斷してはならぬ。之れに反して各箇人意志は夫れ夫れ合成果に貢献し、而してさうである以上、合成果の中に含有されて居るのである。」

今右のエンゲルスの言述に就ては、ゾオルトマンの評して居る如くに、余も亦左の

如くに評したいと思ふ。即ち右の言述は「唯物史觀のもと」の理論の本質的な修正を保有するものにして、決してもとの理論を其の儘に保持するものでない。殊にマルクス及び自分は、歴史に於ては最後に決定する要素は、現實なる生活の生産及び復産であると云ふより以上は、決して主張したことがないと云ふエンゲルスの言葉は、何人も承認することが出来まい。彼等は時々遙かにより以上を主張したことは疑ふ可からざる事實である。而して又右の言述中に發見される種々なる思想、例へば觀念的表象が歴史的闘争の進行に影響を及ぼし、且つ多くの場合に於ては主として其の形體を決定したと云ふ思想の如きは、嘗て彼等の主張しなかつたものである。かゝる相互作用の概念は、彼等の以前の論述中には發見し得られない歴史の一新要素である。」

次に *Leipziger Volkszeitung* に於て公にされた書簡(千八百九十年に書けるもの)に於ては、經濟的基礎と觀念的上構との關係が、社會的分業の見地から説明されて居る點に於て、唯物史觀の上から見て重要な意味を含んで居る。社會的分業の原理の重要はマルクスも注意して居たが、併し其の詳しき展開は嘗て企だてなかつた。エンゲルも同様であつた。然るにエンゲルスは此の書簡に於て社會的分業が精神的生

活に對して、如何に重要な意味を有するかを始めて説述して居るのである。此處に其の要點を簡單に述べて置くが、夫れ分業が社會的に發達する處では、又分れた業は相互に對して獨立してくる。かくて最後の決定的要素たる生産に對して、商業及び金融等は特有の法則に従ふ獨立なる要素として發達する。夫れは政治的及び法律的職務に就ても同様である。此等のものも相對的獨立性及び自己運動を有するに至る。此くて相異なれる諸勢力の間に相互作用が行なはれ、而して夫れに於て經濟的運動が終局成就される。高く空中に浮遊する處の觀念的諸範域、宗教や哲學などに關しては、此等のものは歴史前的な、歴史の時代に傳はれる状態、今日吾人が背理と稱するものを保持する。自然や人間其物の性質や、靈魂や、魔力などに關する其等の虛妄なる表象の根柢には、最も多くの場合に於て只消極的な經濟的事情が存するだけである。歴史前時代の低い經濟的發達は、自然の虛妄なる表象を補充として、併し又處々では條件として、更に原因としてさへも保有する。而して假令經濟的慾望は進歩する自然認識の主要なる衝動力であつたとは云へ、又益々そうなつたとは云へ、尚ほ人若し總て其等の原始的痴愚に就て、經濟的原因を探らんとするならば、夫れは街學的であるであらう。學問の歴史は此の痴愚の漸次的排除の歴史、隨ふて新

しき併し常により少なく荒唐なる痴愚を以て、之を取り替へることの歴史である。此の仕事に従ふ人々は又分業の特殊な範圍に屬し、彼等は一の獨立な範圍を作り上げる。而して彼等が社會的分業の内に於て一の獨立なる團體を成す以上、彼等の生産、彼等の謬妄をも含めては全社會的發達の上に、經濟的發達の上にさへも、一の退歩的影響を及ぼす。併し夫れに拘らず、彼等自身は又經濟的發達の支配的勢力の下にあるのである。經濟的發達の最後の至上權は此の範圍に於ても確立される。併し夫れは箇別範圍其物によりて規定されたる條件内に於て行なはれる。例へば哲學に於ては、夫れは前人の傳へたる現存の哲學的材料の上に、經濟的勢力の作用することによりて行なはれるのである。此處に經濟は夫れ自身から直接に何物をも創造しないが、併し現存の思想材料の變化及び發達の仕方を決定する。而して夫れは又最も多くは間接的である。但し哲學の上に最大の直接的作用を行なふものは政治的、法律的、道德的反射であるのである。總て此等の觀念的諸勢力は夫れ夫れ特殊な役目を演ずるが、夫れは云ふまでもなく、彼等が經濟的條件に一般的に依存する範圍内に於てある。現實的なる世界の全進行は甚だ相異なる諸勢力の相互作用の形式に於て行なはれる。而して其等の諸勢力の中にて遙かに最も強大にして

最もも原本的、最もも決定的なるは經濟的運動である。

以上述べし處によりて見れば、エンゲルスは此の書簡に於て、社會的分業、社會的及び之れに應ずる精神的諸領域の獨立化、各領域の獨立的なる性質に內在的なる、特有の運動法則に従ふ發達、經濟的關係に對する一般的依存と特殊的依存との區別、觀念的範域に於ける經濟の直接的影響と間接的影響との區別、經濟に於ける觀念の反動、表象界に於ける消極的なる經濟的影響等を説き、以て唯物史觀が始めに社會の經濟的基礎と上構との間に存すると認めし直接的な又單純な關係を大に分化し、複合化して居ることが、明らかに覺られるので、彼の晩年の思想はもとの唯物史觀或は通俗的唯物史觀とは餘程異なつて居たことが推察されるのである。而してエンゲルスの右の晩年の思想に於て見るが如くに、諸種の社會現象間の相互作用を重要視するに於ては、假令經濟的勢力の最後の至上權を固守するとしても、實際に於ては社會現象位階説を保持するところが甚だ困難となるのである。諸種の社會現象間の相互作用を重要視する思想を論理的に展開して行くと、結局は社會現象位階説を棄て、社會現象並立的相關説に達するのである。而して夫れが又社會現象の現實的なる歴史的關係に對しても、社會現象位階説の見解より適當であることは、詳しく之を研究す

るに於て愈々明らかに理解されるのである。尙ほ經濟其の物を正當に理解して之を詳しく分拵する時には、其の中に多大なる觀念的要素の含有されて居ることが發見されるので、之を單に生物と物質的圍境との關係と見ることの正當ならざるは、直ちに覺られるのである。要するに余は嚴密に科學的に考察するに於ては、原因的見地より見て諸種の社會現象間に位階的秩序を立てることは到底不可能であるので、殊に經濟を以て其の最も根本的なる基礎或は原因と見ることは、假令アストラロの云ふが如き意味に於ても、赤エンゲルスの晩年の思想に於て見るが如き意味に於ても正當ではない考へるのである。而して社會學者間にありては、大體上同様な思想は現世紀の始め頃、即ち余自身の社會學上の思想の固まりかけた頃からして、一般に行なはれて居るので、現世紀に入りてよりは、新たに社會現象位階説を立てんと企だてた社會學者は一人もないかと思ふ。少なくとも専門家の注意に値する程な社會現象位階説は、現世紀に入りてより一も現はれて居ない。而して一般に社會現象は並立相關的なるものと見て、一定の見地からして之を組織的に排列せんと企だてゝ居るのである。但し其の中には多少位階的思想を含ませて居るものもある。併し根本的には、並立相關説は今日一般に承認されて居るものと認められるのである。

然らば文化哲學上に於ける價值體系論の軌近の發達に於てはどうか、矢張り同様の傾向が達して居るか。余は次節に於て此の問題を考究したいと思ふ。

(未完)